

「あの学校、オレに合わん」

昨年十一月この欄で「不良化」する息子で悩む母親のことを書いた。題「ひとは自分で自分を変えていく」の通り、たしかにこの青年に明るい兆しきざしが見えていた。しかし、年賀状も来ない。やっと来た便りは、「家庭がこんなに脆もろいものとは……」の書き出し、悲痛悲惨の極み。ああ、息子はついに退学処分。それをめぐって今、家族間には不信といがみ合いの泥沼、と泣いている。

身内でもないが、早速電話。息子はどうしている？。「あの学校、オレに合わんと言つて、自分で理容学校受験の手続きをすませ、けろっと」。

そうか、よかった。息子は正しい。放校した学校に勝っているではないか。心配ない。

「でも家中は世間体がと……」。息子が自ら選んだ道を邪魔する者は親でない。君は息子のために祈っているというが、自分たちの都合を祈っているだけだ。もつと深く祈れ。祈りは祈りを洗っていく。やがて息子が見えてくる。仲間、その不良仲間はい

るのか？

「いる、いる。一カ月で退学させられた者も。その中ではとても明るく……」。それが一番の救い。連中を家でごちそうするとよいね。「今、その気にはとても……」。

親には人生敗惨に見えても、愛息の新出発だ。胸いっぱい祝福せよ。君は君自身が変わらねばならない。理容師、腕で生きる、立派な職業。「働きびと」を尊敬せず、管理職志向のみの日本はただ亡びへの道だ。息子はまた失敗するとしても、帰れる母の胸があれば、乗り越えていくものだ。イプセンの放浪者「ペールギュント」のよう
にね。

(一九九五年二月十四日)